

「人生初の幸運」—トロロープゆかりの地、アイルランドのバナガーとドラムスナを訪ねて—

香山はるの

1. はじめに

アンソニー・トロロープ (1815-82) の生涯において、アイルランドは非常に大きな意味を持つ。死後に出版された『自伝』 (*An Autobiography*, 1883年) にトロロープが自ら書いているように、貧困に苦しんだ幼少時代、パブリック・スクールにおける少年たちの軽蔑やいじめ⁽¹⁾、奨学金が取れずに断念した大学進学、就職した郵便局での上司との衝突等々、それまでの惨めな人生を一転させたのが、1841年から始まるアイルランドへの赴任であった。トロロープ26歳の時である。当時彼が勤務していたロンドンの中央郵便局では、郵便監督官付事務員としてアイルランドへ転勤すると言えば、いわゆる「左遷」といった不名誉な印象は免れなかったらしい (*Autobiography*, 61)。しかし、借金や職場における人間関係のトラブルに悩まされ、経済的にも精神的にも追い詰められていたトロロープは、そうした苦境から一刻も早く脱け出したいという一念でこのポストに志願し、上司の許可を得たという。それから30年以上の歳月を経て、人気作家の地位を確立したトロロープが『自伝』の中で、このアイルランドへの赴任は「人生初の幸運」(59)であったと感慨深く振り返っているのは、興味深い。「アイルランドに足を踏み入れた日からこれまでの不運は全て消えてしまった。それ以来、一体誰がこの私より幸せな生活を送ってきたというのだろう」(60)。事実1841年9月から1859年11月まで過ごしたアイルランドで、トロロープの人生における数々の幸せな変化が起こったことは注目に値する。たとえば、郵便局で仕事の能力を高く評価され、経済的な安定を得たこと、多くの友人を得、キツネ狩りのような生涯続く楽しみを見つけたこと、ローズという伴侶を得て2人の子供にも恵まれ、穏やかな家庭生活を築いたこと、そして何より、作家になるという少年時代からの夢を実現したことなどである。この意味でアイルランドへの転勤はまさにトロロープの生涯の分岐点と言えるであろう。また、彼が書いた最初の小説(『パリークランのマクダーモット家』1847年)と未完に終わった最後の小説(『土地同盟の人々』1883年)が、どちらもアイルランドを舞台にした作品であることも示唆的である。

しかし、その一方でトロローブは、一般に19世紀のヴィクトリア朝中流階級の作家としてこれまで捉えられ、代表的な作品としては専ら「バーセットシャー年代記」（“The Chronicles of Barsetshire”）などイギリスを舞台にした作品が取り上げられ、前述のようなアイルランド小説はむしろ「失敗作」として軽視されてきたという点是否定できない。2012年の夏、アイルランドでトロローブ・ソサエティが企画する催しがあることを知った私は、トロローブが愛したアイルランドを実際に見、その世界に触れてみたいという欲求、アイルランドでトロローブがどのように捉えられているのか探りたいという素朴な好奇心、そして自分が抱いてきたトロローブ像に欠落している部分があるのではないかという危惧とそれを埋められるような新しい視点が得られるかもしれないという期待に後押しされ、アイルランドを訪れた。私にとっては、文字通り初めてのアイルランドであった。

Ⅱ. バナガー、ドラムスナ—トロローブのアイルランド

8月27日。ダブリンから車でアイルランド中西部、レンスター地方、オフアリー州のバナガー（Banagher）⁽²⁾ という町に向かう。アイルランドにおけるトロローブの最初の赴任地である。残念ながら彼が勤務していた郵便局はすでに移転してしまっているが、その隣にあった、トロローブと上司が仕事部屋として使っていたバンガローは残っているという⁽³⁾。日本から問い合わせの手紙を出したところ、このバンガローの現在の所有者であるパット・アイボリーさんから「どうぞ見にいらして。大歓迎だから（“more than welcome”）」と親切に言っていた。その言葉に甘えて、ダブリンからカーナビを頼りにバナガーまで3時間ほど車を走らせた。

バナガーは人口約1,600人の小さな町である。アイボリーさんのバンガローは町の中心に伸びるメイン・ストリートにあった。（平屋で二部屋のこのトロローブの仕事場は、私が想像していたものよりもさらにこじんまりとしていた。）シャノン川付近にはトロローブが宿泊したと言われるロイヤル・シャノン・ホテル（現在は使われていない）があるが、小さなパブやB&B、教会、薬局等があるほか特に目立った建物などはなさそうである⁽⁴⁾。しかしジョン・ハインズが指摘しているように、19世紀のバナガーは農業や産業で今日よりも繁栄していたようである。特にトロローブが到着した1841年の9月には有名な市が開かれており、家畜や農作物、革製品など様々な物が売り買いされる活気ある町の様子に、この未来の作家が少なからず「カルチャー・ショック」を受けたであろうとハインズは推察している（125）。確かに、ロンドンからやって来たトロローブが、このアイルランドの田舎町を見たときの新鮮な驚きは想像に難くない。この町から、トロローブは近隣の郵便局の帳簿のチェックをしたり、郵便物に関する様々な苦情

に対応したり、郵便の配達ルートを確認すべくしばしば馬を走らせ、様々なアイルランドの景色や家を目にする機会を得たという。この経験が彼が後に描くアイルランドの姿に反映されていることはほぼ疑いがない。

時に習慣や考え方の違いに戸惑いを感じたものの、総じてトロローブはアイルランドの人々を愛した。彼は『自伝』の中で、おどけて次のように書いている。「アイルランドの人は私を殺さなかったし、襲いさえしなかった。まもなく私は彼らが気さくで賢く、一実際労働者階級はイギリスの労働者階級よりもはるかに聡明である—締め切り屋で他人を温かく受け入れる人たちなのだわかった」(66)。たとえば1866年の短編、「バリモイのジャイルズ神父」には、アイルランドの小さな町を訪れたイギリス人が大失敗をして窮状に陥り、地元の寛大で人の良い神父に救われるというユーモラスな話がかかれていますが、これはトロローブの実体験を基にしたものらしい。私も今回の訪問で親切にいただいたアイボリーさんから、アイルランドの伝統的なホスピタリティーの精神を表すゲール語“céad mile fáilte”（英語で“a hundred thousand welcomes”、すなわち「心から大歓迎」の意味）を教わったが、かつては今以上に客人を歓待する習慣があったという。ヴィクトリア・グレンディニングの指摘を待つまでもなく、こうした温かいホスピタリティーやイギリスの堅苦しい階級意識や道德規範から解放された人間関係は、まさにこの時期トロローブが求めていたものであったろう。およそ20年後に書く『北アメリカ』(1862年)という旅行記の中でも、トロローブがアイルランドやアイルランド人について懐かしさと愛情を込めて語っているのは興味深い。

8月28日。コノハト地方リートリム州のキャリック・オン・シャノン(Carrick-on-Shannon)で『バリークロランのマクダーモット家』の主人公サディが極刑を言い渡されたという昔の裁判所(現在は劇場)を見学した後、この物語の主な出来事が起こるドラムスナ(Drumsna)に向かう。キャリック・オン・シャノンから東に6キロほど離れた人口700人ほどの大変小さな村である。ここでも、あらかじめ連絡を取っておいたトロローブ・ソサエティのメンバー、コリン・ガッキアンさんと息子のバリーさん、そして長い付け髭をつけてトロローブに扮した彫刻家のジム・ギャノンさんに温かく迎えられた。1843年仕事でこの村を訪れたトロローブが、友人ジョン・メリヴェイルと散歩をした際にカントリー・ハウスの廃墟を見つけ、その館がどのようにしてそのような陰鬱な姿になったのかあれこれと想像をふくらませて処女作、『バリークロランのマクダーモット家』の物語を書いたことはよく知られている⁽⁵⁾。この廃墟はドラムスナの中心から歩いて30分ほどの牧草地に今も残っており、ヘッドフォード・ハウス、または小説に因んでバリークロラン・キャッスルという名で親しまれている。自分たちの住む村がトロローブの小説の舞台となったことを誇りに思ったドラムスナの人たちは2008年、彼が宿泊したという「アイビー・ツリー・ハウス」あたりからメイン・ストリートを抜けてここに至るまでの道を「トロローブの道」

（“Anthony Trollope Trail”）として整備した。また、村興しの一環として村人総出でこの小説を映画化したり、トロロープ・ソサエティのサマー・スクールなど数々の催しも行ってきた。

当初ドラムスナ村のこのような熱心な活動を知った私は、不思議な気持ちが湧き上がるのを禁じ得なかった。なぜか？ 1845年からアイルランドを襲ったジャガイモ大飢饉はあまりにも有名だが、中でも厳しい自然環境と不毛な土地で知られる西部コノハト地方は極めて大きな被害を受けたといわれる。アイルランドを愛したトロロープではあるが、彼もまた19世紀のイギリスの多くの知識人と同様、大飢饉は過剰な人口を抱えた貧しいアイルランドを救う神の摂理に他ならないと主張し、「不誠実」と批判されるイギリス政府の対応を擁護したのである⁽⁶⁾。たとえば、『土地同盟の人々』の41章で語り手は述べている。「人が世界を正しく支配できないときには、神が介入し、御自らの腕で飢饉や天災、疫病—さらには、貧困さえ一生じさせてくださるのだ」（343）。また、三作目のアイルランド小説、『リッチモンド館』（1860）の語り手も、飢饉を「慈悲深き神の救済」と述べた上で、イギリス政府が取った措置は「迅速かつ賢明で情け深いものであった」（68-9）と断言している。さらに、グレンディニングの言葉を借りれば、こうした飢饉に対する「傲慢な楽観主義」や「病的ともいえる無神経さ」（184-85）に加えて、アイルランドの自治—いわゆるホーム・ルール（Home Rule）—にトロロープが強硬に反対していた点も看過できない。「必要なことは—とにかくイギリスの安全のために必要なことは—アイルランドがイギリスのものであるということだ……そして私自身の意見をつけ加えるならば、それはアイルランドの幸福のためにもまた必要なことなのだ」（*Landleaguers*, 343）。

このようなイギリス中心の考えを、今日アイルランドの人は過去のものとして甘受しているのであろうか。今回ドラムスナ村の方々と話をして感じたことは、おそらく彼らは、トロロープの物語の中に、このような保守的な考えの背後にある、アイルランドに対する彼の深い思い入れを認め、受け入れているのではないかとということである。たとえば、トロロープ・ソサエティの会員であり、ドラムスナにおける「トロロープ・プロジェクト」を推進させてきたコリン・ガッキアンさんによれば、『バリークロランのマクダーモット家』の中でトロロープはアイルランドの農民の言葉を非常に生き生きと再現しており、また、近隣の村々（モーヒルやアガキャッシュル等）の地理的な特徴を、短い滞在にしては驚くほど正確に捉えているということである。さらに、この物語に描かれるアングロ・アイリッシュのウイスキー密造監視官、マイルズ・アッシャーと地元の「リボン団員」、ジョー・レイノルズやコーニー・ドゥーランとの激しい軋轢は、1795年4月にドラムスナで起きた警官と村人との文字通り流血の抗争が下敷きになっているとリーアム・ケリーが指摘しているのも興味深い⁽⁷⁾。かつてアイルランドではいわゆる「アセンダンシー」の「ビッグ・ハウス」の周りには高い石垣が積

み上げられ、自ら近隣に住む農民の世界との隔絶を図っていたが、トロローブはこうした石垣の外にいる貧しい人々の現実を理解すべく、ドラムスナ周辺の地理や歴史を調べたのではない。

『バリークローランのマクダーモット家』は、発表された当初評判になることはなく、一般に殆ど読まれることはなかった。しかし、トロローブは後にこの作品について、語りは未熟であるがプロット自体は評価できる「良い小説」であり、「ジャガイモの疫病や飢饉、土地更生法案 [1849年] 以前のアイルランドの生活」を理解したいと思う人には読む価値のある本であるとコメントしている (*Autobiography*, 71)。そして、そうした大きな変化が起きる以前のアイルランドの農村の風景こそ、まさに自己を再生させた「第二の故郷」としてトロローブが永遠に保持しておきたかったものであり、今日アイルランドの人々がしばしばノスタルジアをかきたてられるものなのではないか。

トロローブは1859年にイギリスに召還されるまで、バナガー、クロンメル、キラニー、マロー、ベルファスト、ダブリン等に移り住んだ。二作目の長編、『ケリー家とオケリー家』(1848年)もアイルランドを舞台にした小説であるが、一作目に見られたような救いのない暗さや閉塞感はないものの、やはり売れなかった。大きな理由として、イギリスの読者がアイルランドの物語を歓迎しなかったということが挙げられよう。当時イギリスではアイルランドの飢饉の話が連日新聞を賑わせており、人々はこれ以上「アイルランドの悲惨な話」を読みたいとは思わなかったのである。実際『ケリー家とオケリー家』の出版を引き受けたヘンリー・コルバーンも、トロローブに宛てた手紙の中でこの本の売れ行きが芳しくなかったことを報告し、「明らかに、イギリスの読者はアイルランドを題材にした小説は好まない」と明言している (*Autobiography*, 78)。しかし、こうした苦い経験にも拘わらず、トロローブは前述の「バリモイのジャイルズ神父」や「メイヨー州コナー館のオコナー家」(1860年)といった短編の他、『リッチモンド館』や『目には目を』(1860年)などアイルランドを舞台にした作品を書き続けた。それは、『リッチモンド館』の冒頭の語り手の言葉にあるように、本国では十分に理解されていないアイルランドの実像を伝えたいというトロローブの意思に依るものと考えられる⁽⁸⁾。

最後の長編、『土地同盟の人々』はタイトルが示唆するように、1879年に始まったアイルランドの土地戦争を扱った作品である。グレンディニングの伝記に詳しいが、当時トロローブはボイコットや脅迫、放火、殺人など過激化する土地同盟の行動に強い懸念を抱き、殊にその会長であるチャールズ・スチュワート・パーネルに非難の眼を向けていた(494)。1882年、キルメイナム協定によるパーネルの釈放やアイルランド担当相フレデリック・キャヴェンディッシュ卿の暗殺に大きな衝撃を受けたトロローブは、健康状態の悪化にも拘わらず、小説の取材のため二度に亘って、静養していたサマセットのハーティングから動乱の只中にあ

るアイルランドに赴いた⁽⁹⁾ (Glendinning, 494-96)。言うなれば、それは「ジャガイモ飢饉や土地更生法以前の平和なアイルランド」まで時計の針を戻したいという彼の切々たる思いの表れと解釈できよう。しかし、先に言及した語り手の言葉（「必要なことは……アイルランドがイギリスのものであるということだ……それはアイルランドの幸福のためにもまた必要なことなのだ。」）に抗するかのように、物語に力強く描かれた小作人の不満や憤りは、トロローブが自らの望みの限界を半ば意識していたことを物語るものではないか。この意味で『土地同盟の人々』にはトロローブのアンビバレントな姿勢が露呈していると見ることもできるのである。

一般にトロローブのアイルランド小説はこれまで高い評価を受けてこなかった。その一因として、アイルランドの飢饉や自治問題に関するトロローブの発言に、批評家の注意が専ら向けられてきた点が挙げられよう。たとえば、テリー・イーグルトンは『ヒースクリフと大飢饉』の中で『リッチモンド館』と『土地同盟の人々』を取り上げ、飢饉を神の御旨によるものと見るトロローブの「道徳的愚鈍さ」(15)を痛烈に批判している。しかし、これまで示唆してきたように、トロローブのアイルランド観は主情的な面一すなわち、彼のこの国に対する強い愛着一を無視しては捉えきれない。アイルランドの自治についても同様である。トロローブはなぜホーム・ルールに異を唱え続けたのか？それは一言で言えば、彼の人生のいわば土台を作ってくれたアイルランドという国を永遠に「自分のもの」として失いたくなかったからである。特に1882年、アイルランドを訪れた晩年のトロローブには、自らの人生の原点をあらためて確認したいという思いもあったのではないか。実際トロローブは、母国の領土拡張を唱えるいわゆる「帝国主義者」ではなかった。たとえば、グレンディニングも指摘しているように、アメリカの独立を、トロローブは子供が成長し親から離れて独り立ちしていく「必然的な」プロセスになぞらえ、穏やかに受け入れている(252)。この視点から見ると、ホーム・ルールに対するトロローブの姿勢はアイルランドに対する彼の深い思い入れによって、むしろ特別な—グレンディニングの言葉を借りれば「例外的な」ものになっていると解釈できるのである(252)。

Ⅲ. 結びにかえて—トロローブのアイルランド小説（今後の課題）

私の初めてのアイルランド旅行は、日本のガイドブックに載っていないような小さな町や村へ行き（しかも番地というものが無い！）、面識のない人を訪れるというスリリングなものであった。一週間ほどの短い期間ではあったが、アイルランドの美しい豊かな自然とそこに暮らす人々の気さくで温かな人柄に触れ、トロローブのこの国に対する深い愛着を思い遣った。既に指摘した通り、トロローブの生涯においてアイルランドは非常に重要な意味を持つが、彼のアイルランド

小説には研究の余地が多く残されている。今回の訪問で、これまで軽視されてきたトロロープのアイランド小説一中でも「失敗に終わった習作」としてしばしば片づけられる初期の作品一を再考する必要性を痛感した。たとえばドラムスナ村の人たちが愛する『バリークロランのマクダーモット家』ですら、今日少数のアイランド系批評家を取り上げる他、評論は限られている。この作品は、行き場のない状況に追い詰められていくサディの心の動き、父親ラリーの狂気、「墮ちた女」フィーミーのキャラクターなど、トロロープが後の作品で追及していくテーマの萌芽が認められる点でも重要である。トロロープとアイランドの関係を見直すこと―それは、作家トロロープの、そして自身のトロロープ研究の原点に立ち返ることでもあるのだ。バリークロランの館の廃墟を眺めながら今後取り組むべき課題についてあれこれと思いを巡らせていると、頬にぼつぼつと冷たいものを感じて、ふと我に返った。アイランド特有の通り雨に背中を押されて、石だらけの牧草地を車へと急いだ。



トロロープが仕事をしたバナガールのバンガロー。中央は現在の所有者、バット・アイボリーさん。

「人生初の幸運」ートロローブゆかりの地、アイルランドのバナガーとドラムスナを訪ねてー



右側の張り出し窓のある建物がトロローブが滞在したロイヤル・シャノン・ホテル（バナガー）。



ドラムスナ村開発協会が整備した「トロローブの道」。プレートにはゲール語と英語、両方の表記がある。



トロローブが『バリークロランのマクダーモット家』の着想を得たというカントリー・ハウスの廃墟。現在、蔦に覆われた2つの高い壁のみが残っている。

注

- (1) トロローブはハローやウィンチェスターに学んだが、貧乏で外見も見苦しかったためいずれの学校でも「除け者」にされたという。
- (2) アイルランドの多くの人は「バナハー」と発音しているようである。
- (3) ジェイムズ・ポープ・ヘネシーによれば、地元ではこのバンガローをトロローブが住んでいた家と誤って伝えられることがあるという (75)。
- (4) 補足するとすれば、シャーロット・ブロンテがアーサー・ニコルズ牧師とのハネムーンの際泊ったとされる「ヒル・ハウス」(現在はB&B)がセント・ポール教会の近くに残っている。
- (5) 小説ではさらに、トロローブがドラムスナからボイルに向かう郵便馬車の中で、車掌からこの館に住んでいた一族について話を聞いたことが示唆されている。
- (6) トロローブが1849年から1850年にかけて『イグザミナー』紙で、シドニー・ゴドルフィン・オズボーン卿のイギリス政府に対する批判に反駁したことはよく知られている。
- (7) ケリーが1997年地方紙、『リートリム・ガーディアン』に寄せたエッセイ、「ドラムスナの少年兵士」は、現在トロローブ・ソサエティ発行の『トロローブ・ソサエティ、アイルランドに行く』(2006年)という冊子に転載されている。
- (8) 出版されずに終わったが、1850年頃トロローブがアイルランドの旅行案内を書いていたことも興味深い。
- (9) 一度目は1882年5月から6月、二度目は8月から9月にかけての訪問であった。ちなみにトロローブはその年の12月に他界する。

引用文献

Eagleton, Terry. *Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture*. London: Verso, 1996.

Glendinning, Victoria. *Trollope*. London: Pimlico, 1993.

Hennessy, James Pope. *Anthony Trollope*. Boston: Little, Brown and Company, 1971.

Hynes, John. "Anthony Trollope's Creative 'Culture Shock' : Banagher, 1841." *Eire-Ireland* 21:3
(Fall 1986):124-31.

Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Oxford: OUP, 1989.

_____. *Castle Richmond*. Oxford: OUP, 1992.

_____. *The Landleaguers*. Oxford: OUP, 1993.